

## 1 目的

現在の我が国の畜産業は安価な輸入飼料に頼っている。近年国の施策として自給率向上のために、飼料米の生産促進が図られている。本校はこれまで飼料米を生産し、これを飼料として利用する研究を行ってきた。さらに、この特殊卵の特徴を活かした加工品の開発を行い、民間との連携した取組を進めてきた。今後は地域資源を有効利用した鶏卵生産技術を地域農家へ普及し、地域農業の活性化に役立てたい。

## 2 実施状況

### (1) 飼料配合の実施

一般的な飼料の主成分であるトウモロコシに替えてくず米や飼料米を配合しさらに国産原料にこだわった飼料を成分を考慮しながら配合した。

飼料の嗜好性を観察し、摂取成分が偏らないように給与量を調整しながら与えた。

コスト的には課題もあるが輸入飼料に頼った畜産の問題点を考え、自給率向上について考える教材となった。また、本校のある伊佐市は県内でも有数の米所であり、市場で販売できないくず米や碎米を飼料として利用できることから、未利用資源の有効活用という面からも生徒への学習効果があった。

### (2) 飼料米の栽培

飼料米は「タチアオバ」を栽培した。これは、子実の収量が多く（10アール当たり籾重量約700Kg）、また草丈も高いのでわらの収量も多い。田植えから収穫までの作業を行った。子実は養鶏部門でわらは肉用牛部門で利用する。これは、本地域の耕畜連携の経営スタイルとして有効であると考えられる。

### (3) 卵の商品性

この飼料を与えて生産される卵は卵黄の色素が薄いために一般の販売方法では、消費者に不評であった。そこで、3年前から製菓店と連携して菓子類の商品化をしてきた。本年度は伊佐市内飲食店との票品開発を行った。

### (4) 鶏肉の商品性

この飼料で飼育した鶏の肉について商品開発を試みるために一般的な鶏肉と食味を中心とした成分について比較分析を行った。しかし、今回の成分分析では特に顕著な傾向は見られなかった。

## 3 今後の課題及び取組

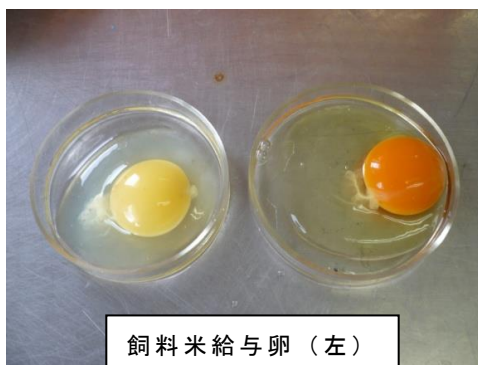
産卵鶏の飼料に飼料米を利用することは、国の施策としては推進されているが生産技術や鶏卵の流通面において課題がある。本校はこれまでこの課題に取り組み、生産から商品開発まで行ってきた。今後はさらに、大学等とも連携し、データを蓄積しながら、地域農家へ普及できる技術として確立していきたい。



飼料の配合作業



米の収穫作業



飼料米給与卵（左）



大学への相談